

# CAC Europeだより

CAC EUROPE LIMITED CAC EUROPE LIMITED CAC EUROPE LIMITED

神山 杏摘 権 ユン スー 呉 巍

## 1. はじめに

現在ロンドン市中心部のテムズ川沿いに位置するCAC EUROPE LIMITED(以下CAC Europe)はCAC America 設立に1年遅れて1990年にComputer Applications (Europe) Company Limitedとして設立された。当時、多くの日本企業がグローバル化を図り、金融系企業を中心にグローバル拠点としてイギリスへ進出していた。日本で強く関係を築いていた金融系企業の欧州進出と共にCAC Europeも顧客と二人三脚でサービスを展開していった。それから30年、現在CAC Europeは海外でプロジェクトを手掛ける複数の金融系企業へシステム・コンサルティングやシステム導入構築のサービスを提供しつつ、2015年からは、さらに業務の拡大に成功し、医薬系企業にもITサービスを提供している。

本稿では、CAC Europeの中堅及び若手駐在員の視点と感想を基にイギリスでの駐在生活を、また、本稿執筆現在句となっているキーワード“Brexit”も併せて紹介したい。

## 2. CAC Europeでの業務と所感

2019年11月の時点で社員は10名、そのうち9名は日本からの駐在員で、ほとんどが顧客先に常駐しており、システム・コンサルティング、システム導入構築、テクニカルサポートをしている。またリモートで欧州各国の現地法人の顧客と直接の仕事も行っている。

まず、文化的な視点も併せ医薬企業での業務で感じていることを述べたい。

多くの医薬企業は、欧州もしくは EMEA ( Europe 、 the

写真1 CAC Europeのオフィスが入っている建物の外観



Middle East and Africa)の統括機能として、リージョナル本社をイギリスに置いている。CAC EuropeがIT、主にインフラ、サービスを提供している医薬企業もその1つであり、EMEA全体の医薬品の生産/物流/販売/情報システムの統括をイギリスで行っている。そのため、EMEAリージョンを対象とした業務では我々がイギリスだけでなく、欧州、中東、アフリカ大陸の拠点も網羅したITサービスを提供しなければならない。イギリスだけではなく国の文化、言語、時差等を踏まえたサポート、プロジェクト推進が必要とされるため、グローバルな振る舞いが必要であり日々やりがいを感じている。

イギリスでの業務開始はとても早く、午前7時半にすでに出勤している人も見かける。朝早く出勤する代りに退社も早く、午後5時頃にはオフィスには人はあまりいない。午後7時まで残業をしていると心配されることもあるほどだ。一方、Smart Working(在宅勤務)の普及が日本より進んでおり、メールが飛び交う中で、顧客が実際にオフィスにいないということもよくある。

また、オフィスを構成している人々は純粋なイギリス人だけではないのが、移民大国とも呼ばれるこの国の面白いところでもある。日々直接仕事をする顧客の中にはインドや南アフリカのバックグラウンドを持つ人もおり、日々のコミュニケーションはイギリスという国を越えた挑戦をすることができる。また、母国語が英語ではない国も多いため、無意識に英語の不便さを相互に気遣いながら会話を進めていると感じる。欧州のIT Managerが集合するある会議の後、「Too much English」とスペイン人が笑いながら話しており、欧州の人は皆英語が当たり前でできると思っていたが、そうではないことに少し安心した。

アメリカで過ごしたことがある筆者にとっては、イギリスで会話する時に表現や伝え方はアメリカより間接的だと感じる。気遣いのある言葉を使うことが多く流石紳士の国だと思う反面、顧客の要望を正確に理解するためには言葉どおりではないことも念頭に置く必要がある。言語や言い回しは違えど、日本人の建前文化に通じるものがあるかもしれない。また、ケースバイケースではあるが、一緒に仕事をしているイギリス人の多くはグランドデザインを重視し、安易に目先の実現可能な計画に妥協しないように感じる。また、彼らの考え方は根本的なことをまず立ち戻って考える習慣もあるため、そのために要件定義に時間が掛かったり、もしくは要件定義を経ても、よりよいアイデアを思いつくとプロジェクトの遅延を顧みず、理想的な結果に近づけようと議論が発展したこともあった。変化していくゴールの中で、終着点を考え続け、うまく交渉しプロジェクト推進する力が問われると感じた。

さらに、プロジェクトや業務を遂行する際に、多くのイギリス人は“Responsibility”という考え方を強く意識しているようで、自分の“Responsibility”の範囲を超えたものについて、基本的には手を出さず、余計な口出しや干渉もしない。当然、相手の定めた“Responsibility”以外のものも要求しないように感じられる。お互いに責任範囲以外のことはやらない権利を尊重する姿は、さすが市民権と社会契約論の思想の発祥地のヨーロッパだと思った。

総じて、欧州の人々と共に仕事をして感じたことは、彼らは異文化に寛容で、かつ自国のプライドを持っているようだ。我々も彼らの文化に敬意を払い理解を深めながら仕事をしている。

次に、金融業界の動向について主に業務で感じていることを述べたい。

イギリスは世界の金融市場の中心として長い歴史を持っているため、日本の企業も含め多くの銀行のリージョナルHQがあり、上記で述べた医薬企業同様、欧州全体を統括している。筆者の金融企業での業務は基本的にシステム運用でありながら、運用担当の立場で新しい開発プロジェクトに参加することも多い。日々の業務で日本語と英語を駆使しイギリスと日本間の円滑なコミュニケーションも図る必要がある。また、開発プロジェクトでは、コミュニケーション以外に進め方の違いも感じている。日本では段階的に進むWaterfall方式で進行するのがまだ主流なのに対して、イギリスの場合は新しく出てくる状況や情報に合わせて都度全体を見直すAgile方式が多用されているように感じる。この2つの方法はどちらが良いか悪いかは言えないが、同じプロジェクト内で日英の担当者が持っているこの認識のギャップにより、プロジェクトの進行上に問題が生じることがある。例えば、日本側は一度確定された定義書や設計書に修正が発生することは中々なく、案件の進み方も初期段階で決定されていることが多いのに比べて、イギリスでは確定された内容も、随時最新の状況が反映できるように再度議論したり、修正することが珍しくない。

また、これらのプロジェクトには銀行内部システムの更改から外部環境の変更対応まで様々な要件があるため、金融業界全体の動きにも注目する必要がある。イギリスはFintech大国の1つで、金融企業がテクノロジーをベースにした様々なサービスを提供している。初めに注目すべきと感じたのは、モバイルバンキング(インターネットバンクがさらに発展したもの)である。モバイルバンキングはすべての金融サービスをモバイル上で提供する銀行で、既存の銀行とは異なり物理的な銀行の空間が存在しないか、あるいは非常に少ない。日本でもじぶん銀行などの銀行はモバイルバンキングに参入し始めたが、イギリスではすでに当たり前で普及している。従来の銀行

と比べて特にサービスの差がない割に、オンラインで簡単に口座を開設できるのが大きい利点である。特に我々駐在員にとっては、従来のHSBC等で口座を開設するには煩雑かつ厳しい住所証明を提示する必要があり、最短でも3ヵ月かかることがあるのに対して、モバイルバンキングであれば、条件に合った身分証明書さえあれば、30分で口座開設ができ、3日間から5日間で非接触式決済機能付きの銀行カードが手元に届く。また、モバイルバンキングの場合は海外でカードを使用するときには為替の手数料が発生しないことと現地のATMにて手数料ゼロで現地通貨の引き落としができるのがもう1つの利点である。筆者自身もMonzoとRevolutの2つを持っており、欧州へ旅行にいった際に空港やホテルでの通貨の両替を必要とせず、非常に便利である。この仕組みは今後日本の銀行サービスの拡大において参考になると感じた。

次に金融業界において注目すべき動きとしては、最も重要な金利指標の1つであるLIBORを2021年までに廃止するとイギリス政府が発表したことである。ロンドン銀行間取引金利(LIBOR: London Inter-Bank Offered Rates)は世界の指標になる金利として活用され、大規模な銀行において最高レベルの信用度の金利ベンチマークとなっていた。しかし、2012年のLIBOR金利不正操作の事件をきっかけに、その信頼性は大きな打撃を受けた。廃止後の影響を最小限に抑えるため、イギリス及び世界の金融業界は対策に追われている。LIBORの代わりとしてRisk Free金利を導入することを金融安定理事会(FSB)などの国際機関は勧告した。この金利は操作される危険性が低く、市場の状況を適切に反映して変動するため、金融取引及び価値評価の準拠指標として使用される可能性がある。Risk Free金利はまだ新しい金利であるため、2021年が近づいている今、活用方法及びシステムとの連携へ大きな課題として我々も動く必要があると肌で感じている。

### 3. 駐在員の生活

日本と同じくイギリスにも冬が来る。イギリスの冬は気温だけ見ると暖かい冬だと思われるかも知れないが、人によって、イギリスの冬を説明するとき「骨にしみるような寒さ」だとも言う。シンガポールで生活をしたことのある筆者にとっては特に寒く感じる。また、イギリスの冬は日本と違って雨の日が多いため、湿度が高く、霧が厚い日も多くある。幻想的な霧模様が立ち込める冬紅葉はまさにおとぎ話の風景描写のようでとても気に入っている。

イギリスの冬の日照時間は短い。夏季は夜10時過ぎてやっと日が暮れるが、冬になると朝8時半になってようやく日が昇るにもかかわらず、3時半頃ですでに暗くなっていることもあ

る。冬の間の通勤時間帯は太陽にあたることは短いため、不足しがちなビタミンDを買う人をよく耳にするのはそのせいだろう。

また、西洋の冬といえば、クリスマスが最大の祭りであろう。イギリスではクリスマス前後に様々なイベントが行われる。最も有名な冬のイベントはハイドパークのウィンターワンダーランドだ。11月中旬から1月初めまで開催される、このイベントはクリスマスマーケットだけではなく、遊園地やアイスリンク、様々なショーがあり、「ワンダー」という名前がとても似合うイベントである。この巨大な遊園地は10月頃から設置を始めるが、解体には1日しかかからないらしい。一晩で消えてしまうので現地の人々の中では「夜中にヘリコプターが丸ごと持っていく」という噂もあるらしい。

他にもKew GardenのイルミネーションやNatural History Museumのアイススケートリンクなどもあるが、最も人々の財布の紐を緩めるのは、クリスマス翌日のBoxing Dayで「激安割引の日」である。休日でもあるこの日に1年分のショッピングを全て済ます人も多いらしい。

ただし、注意しなければならないことは、クリスマス当日である25日はイギリスのすべてが停止する。スーパーやレストランの休業はもちろん、バスや電車などの公共交通も休止となる。クリスマスが来る前に買い物を済ませておく必要がある。

一方、私生活に最も影響するのは食であろう。赴任する前にイギリスは美味しい食べ物がないと聞いて心配していたが、移民の人口増加が理由か、現在はインド、イタリア、アフリカ、韓国、もちろん日本の料理など多種多様な料理を美味しく食べることができる。流行っていると思われるほど、寿司を食べに行く現地人は多いように思う。また、現地のオシャレなデパートに併設している料理器具売場に巻きすも堂々と並んでいる。また、外食の料金は日本より高く、日系ラーメン店ではチャーシュー麺を注文するだけで約1900円となり、トッピングに卵を追加するか悩むほどである。なお、現地のスーパーでは日本と変わらない値段で食材や調味料を購入することができるため、普段の生活には影響がない。そのためTescoやSainsbury's等の大型スーパーでのショッピングは捗るばかりである。

イギリス人は食事の時に会話を交わすのが好きだと感じる。会社でランチを共にする現地人の会話の中身は、サッカー、クリケット、ゴルフなどスポーツの話題が多い。特に昨年(2019年9~11月)日本で開催されたラグビーのワールドカップの時期には、試合がランチ時間と重なったので、食堂のテレビに中継が映っていたのを現地の人々と一緒に食べながら、得点のたびに歓呼の声を挙げていたのを覚えている。また、日本対南アフリカ戦の翌日に「日本が負けちゃったわね」

と残念そうに声をかけられ、スポーツは世界を越えて楽しまれていると改めて感じた。

最後に、駐在員のもう1つの楽しみは何と言ってもヨーロッパ大陸への旅行である。ヨーロッパ大陸と海底トンネルで直結しているユーロスター(新幹線のような電車)を利用して約2時間半でフランス・パリやベルギー・ブリュッセルへ出かけられるため土日を利用して様々な国へ旅行できる。またEUはLCCが発達しており、域内の航空便が非常に安く買える。一番安いチケットは8000円でイタリアに旅できる。日本と比べイギリスの祝日は少ないが、長期休暇を取らずとも、世界遺産巡りやヨーロッパの街の散策に気軽に行けるのだ。さらに、EUならではのメリットとして、ヨーロッパのほとんどの国は国境がないため、ちょっとした休暇を取得してヨーロッパの一周旅行も夢ではない。一方、国を越えた旅行が簡単過ぎて飽きたのか、多くの現地人の旅行スタイルは気候のよいところや好きところで何週間ものんびり過ごすものである。

#### 4. Brexit

イギリスと言ったら、もう1つ絶対避けられないキーワードはBrexitであろう。すでに多くの方が知っているように、Brexitは、Britain(英国)がEUをexit(離脱する)を掛け合わせた造語である。2016年に行われた国民投票で、多くの人の予想に反して僅か1.9%の差でEUを離脱することになった。同年にあったトランプ大統領の当選結果とともに世界の人々に衝撃を与えたニュースは、まだ記憶に新しい。イギリス赴任が決まった当初、まさか自分がその歴史的な瞬間を経験するのかわくわくしていた。

いざイギリスに来てみて、普段の会話では、皆陽気でBrexitに対し何ごともないように見え、その話題も意外と出てこない。多少意見を持っているような時もあるが、離脱するという結果も受け入れているかのようで、まさにIt is what it is(そういうものだ。という意味)の言葉どおりだなと感じた。これは職場での発言を控えめにしているか、お酒が足りていないからなのかかもしれない。一方、影響に対して無関心なのかと思え

写真2 クリスマスパーティーの筆者たち(左から神山、権、呉)



ば、たまに医薬品の輸入ルート、食料品価格、国民医療サービスの改善などの話題は耳に入ってくるため、やはりBrexitに困惑と不安を少なからず持っているのだと感じた。

対して、離脱の期限に近づくとつれ、テレビや新聞がますますの盛り上りを見せている。政府とEUとの交渉状況、与党内での不調和、与党と野党との論争、各政党内でも党員の分断対立などに、時にはドラマを見ているようにも感じた。このドラマのピークを迎えたのは、メイ首相(当時)がようやくEUと合意した離脱案が3度も議会で否決されながら、メイ首相に対しての不信任議案も同時に否決された時である。国民投票で離脱を決めたにも関わらず、一体どうしたいのかと強い困惑を抱いた。その後事態はさらに展開し、メイ首相が辞任。強硬派のジョンソン政権が誕生した。合意なき離脱を辞さずに議会を閉会させて強引に離脱しようとするジョンソン氏の姿勢に多くの人々がそれを阻止しようとした。議会の閉会決定は最高裁から違法との判断が下された後、再開した議会でジョンソン首相の離脱議案に対して修正案が可決されたため、ジョンソン首相がやむをえずEUに対して離脱の延期申請を提出し、イギリスの離脱期限も2020年1月31日に延期となった。ただ、ジョンソン首相が延期申請に署名していないとも言われ、悔しい結果となったと受け取れる。これで一旦合意なき離脱のリスクが先送りされたが、ここまでBrexitの決行が迷走していることに啞然とする一方、政治的な仕組みで政府もしくは国家首脳が強行を制約できているのも非常に感心する。

本稿を執筆の時点では、ジョンソン首相が総選挙のカード

を切り、もう1回国民の意を問うことになった。その結果は与党・保守党が過半数を制し、選挙に大勝した。当初、労働党や自民党が善戦しているといわれていたが、やはり、イギリス全体が早くこの混迷の状況を打開し、EUの離脱に決着をつけた空気になってきていると改めて感じた。これで、恐らく2020年1月31日で離脱が実現されるだろうが、依然として、イギリスが離脱後のEUと通商協定をどのように結べるかが大きな課題として残っている。現在、誰もこの先がどうなるかははっきりとわからない状況で、日系企業向けのBrexit勉強会の中でも行き先は不透明であり、確定後徐々にその影響がわかってくるだろうとの見解が示されていた。CAC Europe自身も現時点では、特にBrexitによる影響を受けていない。主要顧客の動向を見守りながら、ITの視点で顧客のBrexitによる影響を乗り越える対応策を検討する必要があると考えている。

## 5. 今後の展望

上記でも述べたとおり、現在は不透明だがBrexitは今後我々の業務や生活に何らかの影響が及ぶことは予期されるだろう。しかし、仮にイギリスがEUを離脱したとしても、再び貿易交渉の裁量権を自分の手にしたイギリスは依然として世界の一大国で、ヨーロッパで最も重要な国の1つであるのに違いはない。そんなチャレンジと機会が併存するイギリスでCAC Europeは2020年に30周年を迎えようとしている。時代、業界、テクノロジーの変化と共に我々のビジネスをよりよい方向へ向かわせるよう柔軟に、そして顧客に寄り添い続ける姿勢で、さらなる10年の成長を目指していきたい。